

Title	日本史の研究, 三浦周行著
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.2, No.1 (1922. 11) ,p.135- 136
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19221100-0135">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19221100-0135</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 日本史の研究

(三浦周行著)  
岩波書店發行

現代のわが史學界に於ける三浦博士の地位は、いまさら云爲する必要はないが、かつて『法制史の研究』其他多くの論著をもつてわが史學界を指導されたる博士は、いままた『日本史の研究』といふ本文一三五六頁にわたる大著を公にされた。

本書は過去殆ど三十年間に於ける博士の日本史に關する研究であつて、すでに發表せしものと、筐底に藏せられたるものとを一書にまとめたものである。従つて首尾一貫せる系統的國史ではないが、その研究範圍は、時代からも問題からも極めて廣汎に亘るものであつて、博士の學的努力のすばらしく偉大なることを示してゐる。簡單にその内容を紹介すれば、第一編文化批判は、概論皇室、思想及び信仰、學問及び藝術、社會及び政治、地方の文化の六章に、第二編人物批判は、概論、列聖及び皇族、公卿及び武家、學者、釋家の五章に、第三編對外關係は、外交及び貿易、外寇及び外征の二章に、第四編歴史地理は、都市の發達、港灣の發達、近畿の史蹟、戰爭及び古戰場の四章に、第五編史料研究は、圖書、文書の二章に分たれ、大小七十二編の論文からできてゐる。如何に博士の理解力の多方面に亘るかは、これによつて知ることのできるのであるが、しかしおのづからその間に博士の研究の特色をうかがうことができる。即ち時代において、鎌倉、室町、戰國時代の中世紀が最も多くの部分を占め、またその見解の卓越を示してゐる。例へば第一編における皇室や社會及び政治、第二編

における公卿及び武家、第三編の全部、第四編及び第五編の大部分は、いづれもこれらの時代に屬するものであつて、同時に本書の重要部分をなすのである。

博士はその序文において、明治時代より今日に至るまでの日本史の研究の變遷とその業績とを一瞥され、ついで今日その研究の沈滞停頓の聲あるを慨し、現今史學界の進展をはかる方法としてつぎの三方法を呈示されてゐる。第一、根本史料の普及。第二、研究法の普及。第三研究業績の普及。歴史の研究が事實の上に建てらるべきものなる以上、事實の基礎たる史料の選擇が大切であり、従つて根本史料を普及せしむることが最も重要である。しかしそれを理解し利用すべき方法が知られざれば無意義とならう。がこれらの史料に基ける學者の業績が、狭き範圍のみに知られて一般社會と沒交渉とならば、研究の孤立となつて、一般社會を裨益せしむることができない。それ故學者自身その業績を發表して社會の諒解と批判とを求むる必要がある。かくして始めて前人の努力を繼承して更に一段の進歩をとげ、また史學界の停滯を破るべき新機運を促進せしむることができやうと言つてゐる。

而して本書の公刊は、かかる意圖をもつてなされたのであつて單にこの點においても本書の出現は、假令その研究態度乃至その結果にまゝ異論があらうとも、わが史學界に重大なる意義をもたらすのである。われらは博士のこの意見に全く同感するのみならず博士の如き大家が青年の意氣をもつてわが史學界に一大警鐘を與へらるることは、われらの大いに痛快とし、幸榮とし、感謝するところである。不斷の研究を怠るもの、または學問をして一般

社會と交渉せしむるものは、博士の態度によつて反省すべきであらう。最近いさゝか新活動の機運のほのみゆるわが史學界が、本書によつて更にその活躍の刺戟を與へられたのは喜びにたへない。(松本芳夫)

## 古墳と上代文化

(高橋健自著)  
國史講習會發行

本書は文化叢書第九編として刊行せられたのであるが著者高橋健自氏は帝室博物館歴史課の主任で先きに「考古學」「鏡と劔と玉」等の著書ありて考古學の權威である事は今更記す迄も無い。本書は第一章總説、第二章墳丘、第三章石槨及横穴、第四章石槨及甕棺、第五章餘論の五章より成り是を更に四十八節に細別し論述せられ、猶四十餘種の挿圖がある。次に自分の一讀して參考となつた處を二三紹介す事にする。

第一章の(一)古墳の意義及學術的價値に於て「考古學上の古墳は高く著しい墳丘を以て造營された土代の墳墓に對してのみ用ひられるのであつて、墳丘があつてもそれが餘り目立たなく、葬制が佛教によつて營まるやうになつてからの墳墓は古墳と呼ばないのである。であるから我が國に於ける古墳の時代は平城宮都以前火葬がまだ社會の上流に行はれなかつた期間を指すべきである。」と古墳の意義並に其の時代に付きて説明せられ、次に「文獻的史料が甚だ貧弱なる時代(原史時代)に當つて、當時を考察すべき好個の資料は實に古墳にあることを忘れてはならぬ。記紀等の記載

は何といつても後に出來たものであるが、古墳はその時代に於て築かれた重んずべき記念物の一で、それから發見された幾多の遺物は正確に當時を物語る最有力なる物件である。考古學者が不文の記録として古墳を重んずるのは即ちこの故である。我が上代文化は畢竟この不文の記録に立脚して研究されるのでなければ確實性を有し得ないのである。」と古墳の學術的價値につきて論述せられて居る。

第二章墳丘(五)埴輪に於て、有名なる垂仁天皇の埴輪起原傳説につきて「從者生理傳説(日本書記)は人垣設立(古事記)を具體化した臆説で、人垣を立てたとは埴輪土偶を立て列べたことであらう。換言すれば日本書記の記載は陵墓に立つて居る土偶土馬の類を見て、土師部の輩がその祖先と仰ぐ野見宿禰の徳を讃すべくいひ出された俗傳と思はれる。」と猶上古の殉死につき「吾輩は埴輪と殉死とを引離して考察するの妥當なるを信するのである」と云はれて居る。又埴輪配立の目的につきては實用と裝飾との兩意義の存在を認め、圓筒から進化して土偶の類が出來、最初は墳丘の區域を劃する爲、一は封土の流失を防ぐ爲に圓筒を排列したが、それが文化の發展に伴ひ、墓制完成期に於ては實用より裝飾を目的とするに至り、其の墳丘表面裝飾の俗習は我が國民性の自發に起つたものであると。又同章(八)墳丘各型式の起原及び時代に於て、我國特有と云ふべき前方後圓の發生期が金石併用時代迄遡り得るとなし其の一證左として大和の畝傍山の東麓に接したイトクノモリの古墳を挙げられ、猶學界未定説の同墳の發生理由につき諸説として清野謙次郎博士の土壇階層連接説、濱田耕作博士の丘